＊　障害のある子どもが放課後児童クラブで過ごす際に、個別に継続した援助が必要とされる場合には、放課後児童指導員を加配するなどして適切な援助が行われている。その際、子どもにある障害への理解と支援の技法が放課後児童指導員間で共有されており、実際の支援について、専門機関（者）等の相談が受けられる体制がある。

（「改訂版・放課後児童クラブガイドライン」＜前掲＞「５放課後児童クラブに通う子どもへの育成支援の内容」より）

【資料３－１】保護者が、子どもを放課後児童クラブに通わせてよかったと思ったこと（アンケート結果）

「(子どもを) 放課後児童クラブに通わせてよかったこと」回答（427 件）

a.安心して仕事に打ち込むことができる。/安心感を持って子どもを預けられる。(169 件)

・毎日、放課後に安心して過ごせる場所があるのがなによりです。大変感謝しています。

・保護者が帰宅するまでの間、放課後、一人で自宅にいるのではなく、児童クラブに行けることで、安全面で安心できるため。

・放課後安心して仕事が出来る（一人を家で過ごさせるのは心配)。夏休み、冬休み、春休み等長期休暇の時に安心できる（長期間１人で過ごさせるのは不可能)。

・両親が帰宅するまで、子どもたちが安全な居場所で安心して過ごすことができる場所があると　いうのは、親の就労にとってもメンタリティにとっても非常に大きな助けになる。

・その日の気分と体調にあわせて、友達と又は一人で充実した放課後を過ごせていること。災害時に引率してくださる方がいる安心感を考えた時に、児童クラブにお世話になれて良かったと思います。

・災害があった場合、両親が行くまで保護してもらえる。

・自営の為、子どもが仕事場にいると、火傷やケガをしてしまう事が多く、親も仕事に集中できるので、大変ありがたいと思います。

・共働きの為、又ひとりっ子なので、もし児童クラブがなければ学校が終わって親が帰宅する夕方過ぎまでの時間どうしていたかと考えると本当に助かっています。

・誰もいない家でなく「ただいま」と言って帰ってこられること。体調が悪い時に連絡をいただいたこと。震災の時、いっしょに帰りを待っていていただいたこと。数えきれないほど良かったことがあります。

・子どもを一人で不安な気持ちにさせずにすむこと。

・「ひとりで留守番」や「ひとりで〇〇へ行く」がまだできない子なので、毎日帰って過ごす場所があるのはとてもありがたいです。

・子どもは１年生の時、児童クラブに空きがなく待機（１年間）していました。私は、小学校の生活に慣れていない子どもに留守をあずけ不安、近所に遊ぶ場所が少なく車も多いので、仕事をしていてもずっと子どものことが心配でした。２年生になり、入室することができ、安心して仕事に集中できるようになりました。

b.「子ども自身が進んで通っている」(21 件)

・「児童クラブが大好き！」と楽しそうに通えていること。

・指導員との信頼関係により、自ら行きたい、と思える「場所」となっていること。

・とても雰囲気の良い児童クラブなので、放課後子どもが家に帰る様に喜んで通っている。

安心して過ごすことが出来る場所であり有難く思っている。

・毎日喜んで通っています。四季折々のイベントを考えてくれたり、工作を指導してくださったり……ただ空間に居るだけではなく細やかな配慮をしていただいていると感じます。

・指導員の先生方が本当によくしてくださるので、子どもが喜んで児童クラブへ行くようになり、「○○をしてあそぶ」、「○○（工作）を完成させる」と目的をもって通うようになっていること。

・何より子どもが児童クラブで友だちと遊ぶことをとても楽しみにしていること。

・毎日、とても児童クラブに行くことを楽しみにできていて、それによって学校生活も快適なものになっている。

・子どもが自然に通えている。

・子どもが放課後児童クラブでの出来事をのびのびと楽しそうに話している時。

・仕事が早く終わり、早めにお迎えに行った時、いつも通り、18時に帰りたいと言った時。

c.「信頼できる指導員がいる」（64件）

・とてもあたたかく迎えてくださること。とてもきめこまかいケアをしてくださること。子どもたちが遊ぶところに大人がいるので、いい感じで争いもうまくおさまり遊び育つこと。

・家族でやるべきことと家庭でやるべきこといろいろありますが、児童クラブに喜んで通い、時間もフルに使い、いろいろな面で成長を助けてもらっています。

・指導員の先生が子どもの個性にあわせて丁寧にかかわってくださり、子どもに信頼できる大人が増えた。

・先生方のことが大好きで、他者に信頼を寄せる経験が十分できていることは幸せなことと思っています。

・先生方があたたかい目で見てくれて、子どもが安心していろんなことにチャレンジできている。

・あんまり活動的な子ではないのですが、指導員の先生方が声をかけてくださり、外遊びやボール遊びに自分から参加するようになり、動くようになりました。お友達とトラブルがあっても、児童クラブでじっくり話し合いをさせていただけるので、本人たちもひきずることなく、親もひきずることなくいられました。

・“れんらくちょう”で一日の様子を知らせてもらえる（とてもていねいに連絡してもらえる）。

・先生方の子どもへのまなざしがあたたかく、保護者とは違った側面から子どもの姿をとらえてくれる。

・子どものことで心配なことがあった時、児童クラブの先生方にすぐ相談できたこと。

・行動を見守り、適宜指導してくれる大人が複数近くにいること。

d.「遊びや文化活動の内容が充実している」(84 件)

・放課後、安全に遊べる環境が整っている。
・屋上や公園があり、十分に外遊びができること。
・放課後から夕方まで、思いっきり遊ばせてもらえて、子どもが喜んでいます。
・外あそびをたくさんするようになった。
・保育園から小学校と、急激な環境の変化の中、児童クラブでは保育園の時のように十分遊べるのでとても精神衛生上良いと思っております。
・家にいるとマンガばかり読んだり、ビデオを見たりということがほとんどなので、季節によって手作りのものを作ったり、運動したりといろいろな遊びをするようになるので、よかった。
・こま、まりつき、すもう、創作など家庭では思いつかないような、かつできないような伝承遊びをたくさん教えてもらえる。
・デジタル機器のない放課後を過ごし、楽しい遊びを自分の力で作り出せるようになったこと。
・何事にもチャレンジする前向きな気持ちが身についたと思う。先生をはじめ、上級生の励ましでどんどんやる気になり一輪車や鉄棒が上達した。
・家ではやらないような遊びを覚えてくること。学年差、男女差で遊びは変わるので、児童クラブで幅広い興味を持つことができる。

e.「季節行事や親子行事等、家庭では経験できないことを体験できる」(29 件)

・様々なイベントがあり、とても楽しんで登室しています。お正月休みには早く児童クラブに行きたいと言っていました。
・季節によって様々な行事をしてくださり、子どももとても楽しんで通わせていただいているところ。
・児童クラブがいろいろと行事を大小企画してくれ、親だけではなかなか体験させてやれないことなどもできたことがありがたかった。
・我が家だけではなかなか行けない所に行けたり、やれないことができたりしていること。
・我が家では児童クラブに子どもを通わせたのは初めての経験でしたが、本当に素晴らしい時を過ごさせていただいたと思っています。休みの日のキャンプやイベントは親にとっても貴重で得がたい経験になりました。感謝の気持ちとより多くのお子さんにもこうした機会が与えられることを願ってやみません。
・一年を通して、保護者も参加できる行事があり、たこあげ、もちつき、キャンプ、バザーなど個人ではできない体験ができる。
・親子参加の行事があり親子共々楽しめる。
・児童館内に児童クラブがあるため、児童館のイベント(まりつきやこま回しなど)に参加でき、家では教えられないようなことを教えてもらえる。

f.「友達が増えた／子ども同士の関係が豊かになった」（187 件）

・沢山の友達ができて、家にいるよりも思いきり遊ぶことができた。その中で人間関係などを子どもなりに学んでいるところ。

・児童クラブに通っていなければ、放課後に遊ぶ友達を探すのに苦労したのではないかと思うが、その点の心配がなくてよい。

・地域でのたてのつながりができ、本人が楽しんで生活をして、いつも遊ぶ友達がいること。

・子どもに、いつでも遊び相手がいること。お友達と、率直に、自然に関わる力がついたこと。

・学校が終ってから親のいない時間を一人ではなく同じ位の年の子たちと共同生活ができたことは、子どもにとって精神的にも不安がなくなる点と兄弟がいない一人っ子なので、学校とは違った友達関係を作る事ができた点が良いと思います。

・一人っ子ということもあり、児童クラブのお友達とまるで兄弟のように遊んでいる姿を見た時に、入室させていただいたことを感謝した。

・普段好まなかったおやつを皆と一緒に食べ、美味しいと言っていたので、家では食べるところまでもっていくのにひと苦労なのに、友達の力はすごいな、と思いました。

・性格が積極的でなく、社交的でもなく、言葉も少ないので、同年代の学校あるいはクラスが同じである子どもがいる集団に属することで、社会性の涵養になっていると思います。

・近所の子どもさんとは別の学校に通っているが、児童クラブで一緒に過ごすことで、帰宅後の時間を共に過ごすお友達ができた。お休みの時等も離れた学校のお友達よりも、近所のお友達と遊べることが楽しいようです。

・父母が働いていて、保育園に通っていた為、近所の子どもとはあまりつき合いがなく、上級生に遊びをおそわる等、児童ならではの交流がなく心配していましたが、児童クラブで上級生に習い、又それを下級生に伝えるということができ、ありがたいと思いました。

・お友達は同じクラス同じ学年だけでなく、たてのつながりも持てるところがよいと思います。ドッジボール、三歩あて……など人数がいるために楽しめるし、こういう遊びの中でお友達通しのやりとりを学べます。体力もつきました。遊びを通じて多くのことが学べるのが何よりです。

g.生活のリズムが保たれ、宿題や自立に向けての生活の支援がある。（35 件）

・規則正しい生活のリズムがあり、たくさんのお友達と宿題をしたり、遊んだりでき、児童館のたくさんの行事に積極的に参加できたり、児童クラブの毎月の行事もあり、子どももとても大好きなので良かった。

・毎日通うことでしっかりした生活リズムが保てること。友達と遊び、先生の話を聞いて、

一緒に工作したり、おやつを食べたり。
・規則正しい生活をおくることができ、勉強の後は、思う存分走りまわったり、体を動かすことができるというところがよかったです。
・長い休みにも規則正しく生活することができること。
・きちんと、きまりのある中での生活は安心して仕事に行くことができ、子どもだけで過ごさせるよりもけじめをつけて過ごせる。
・おやつの時間、学習の時間をとってくださっているので、18 時まで児童クラブにいても安心。（ただ、遊んでいるだけではない、という意味で）
・通常の宿題や夏休みの宿題を児童クラブで頑張って終えてきた時。
・入学するタイミングで転居したので、友達のことや地域のことなど不安要素が多かったが、児童クラブでの友人関係や指導員の先生方と安定した関係ができ、新一年生のスタートがスムーズだった。

h.個別に援助が必要な子どもへの適切な配慮がある。（7件）
・コミュニケーションが苦手な子どもなのですが、お友達とのやりとりを先生方が助けてくれています。最近は、先生の助けなしでもずいぶんお友達と仲良く遊べるようになりました。まだ一人で家にも置いておけないので、仕事に安心して行くことができます。
・子どもは特別支援級に在籍しています。通常級の子どもたちと交流する場が少ないので、児童クラブでそういった子どもたちと関わりがもてることは、子どもの発達にとってもとても良いと思います。
・よかったと思うのは、健常児との生活の中でいろいろと知恵をつけて生活に役立て、成長がみられることと、家庭の事情で仕事もしていることです。助かります。

i.「保護者同士の交流や関係をつくることができる」（18 件）
・小学校とは違う場所、視点で子どもの児童クラブに関わり、子どもと共に親としても様々な交流を持つことができた。
・子ども同士を預け、預かり合い、一緒に夕食を食べ……という中で働く親同士の仲間、友達づき合いができ、とても支えられている。ママ友ができる良い機会を作っていただいている。
・小学校は保育園と違い、親同士の交流が少ない（送迎がないので会う機会が少ない）ですが、児童クラブのおかげで、他学年の保護者とも交流ができ、非常に良いです。
・親同士も、同じような環境の親と知り合う機会ができ、悩みを共有しやすい。
・保護者にとっても、共働きという共通の条件をふまえた幅広い付き合いができた。
・普段ほとんど顔を合わすことのない父母の間でも保護者会、行事等を通じて、指導員、父母間で交流ができ私たちも心強いつながりを持てました。

【資料３－２】アンケート調査票の項目（保護者向け）

※ 設問のみを記し、自由記述の記入欄、及び別紙は省略した。
※ 問５～12の設問は、問４の①②③と同じ回答形式のため、省略した。

問１）児童クラブに通っている、あなたのお子さんは何年生ですか？　（　　年生）

問２）現在の児童クラブの内容に満足していますか？（あてはまるものに○をつけて下さい。）
（　）①満足している　（　）②やや満足　（　）③少し不満　（　）④不満である
問３）お子さんを児童クラブに通わせてよかったと思うことがあればお聞かせ下さい。

ここからは、「放課後児童クラブに通う子どもにとって望まれる支援（案）」についてお尋ねします。お手数をおかけしますが、【別紙１】「放課後児童クラブに通う子どもにとって望まれる支援（案）」と【別紙２】「支援（案）各項目についての参考事例」と照らし合わせ、今後望まれる児童クラブのあり方についてお考えいただき、お答えください。

問４）「１　子どもが、児童クラブに通う必要があることについて、説明を受けて理解していること。また、通い続けることに適切な支援があること」について
（あてはまるものに○をつけて下さい。）
（　）①この内容でよい　⇒問５にお進み下さい。
（　）②内容または表現を変えた方がよい　⇒修正案があれば下欄にお知らせ下さい。
（　）③必要ない　⇒理由があれば下欄にお知らせ下さい。

問５）「２　子どもが信頼でき、あてにできるような大人（指導員）がいて、子どもにとって安心できる関係がつくられていること」について

問６）「３　子どもが児童クラブで安全に過ごすことができるような環境整備と支援があること」について

問７）「４　子どもが、自分の発達の実際に応じた遊びと活動ができるように、環境の整備と支援があること」について

問８）「５　子どもが、ともに過ごしている子どもたちとお互いに知り合うことができ友だちの関係をつくれるような、人数規模の環境と支援があること」について

問９）「６　子どもが児童クラブを自分たちの遊び、生活の場として実感できるように、そこでの規則や秩序を子どもが理解していて、必要に応じて子どもの意見が反映されているようになっていること」について

問10）「７　子どもが放課後を過ごすために必要とされる、休息やおやつの提供、健康への配慮などの基本的な生活への支援があること」について

問11）「８　子どもが、遊び・学習やさまざまな活動に見通しを持ち、自ら進んで取り組めるように支援されていること」について

問12）「９　子どもが障害があることなどによって、児童クラブで過ごす際に援助を必要としている場合には、その援助が適切に受けられること」について

問13）【別紙１】「支援（案）」に新たに設けた方がよいと思う項目がありましたらお知らせ下さい。

問14）【別紙２】「参考事例」に追加した方が良い事項などがありましたらお知らせ下さい。

問15）そのほかに、全体を通してお気づきのことがありましたらお知らせ下さい。

【資料４】放課後児童指導員自身がどのような資質・技能を必要と考えているかについての資料

この資料は、『月刊 日本の学童ほいく』（全国学童保育連絡協議会編集・発行）の平成20年１月号～平成24年12月号に掲載されていた「わたしは指導員」（放課後児童指導員の体験手記）から、「①就業の経緯、②就業当初の状況、③放課後児童指導員の仕事を通して学んだこと、必要と思う資質、技能など、④自己研鑽に役立った研修機会」の４項目を抽出することができた54件について、その内容を要約して記述したものである。

①　就業の経緯（指導員になったきっかけ）（54件）

［求職中に紹介された（15件）］

◆アルバイトを続けていたが、将来を考え、保育士資格をとった。その後、学童保育を知った。

◆友人に紹介された。

◆専門学校卒業後、勤務した先で悩んでいたとき、自分が小学校の頃、通っていた学童保育の指導員に相談したら、指導員の仕事に誘われた。

◆大学卒業後、保育士資格をとる努力をしている途中に友人に誘われた。

◆アルバイトをしていて、知りあいに就職の相談をしたら紹介された。

◆大学卒業後、就職した仕事をやめ、アルバイトをしているときに声をかけられた。その後、短大に入って働きながら保育の資格をとった。保育士の資格取得後、正規職員になった。

◆当初、放課後児童クラブ（保育園と放課後児童クラブの併設）でボランティアをした。大学卒業時に社会福祉法人の正規職員として就職をすすめられた。

◆９年勤めた会社を退職して新たな自分を探そうと就職活動中に（母から）すすめられた。

◆指導員をしている人が家族の友人だったことがきっかけで、アルバイトをして、その後パートとして働いた。

◆大学卒業時に放課後児童クラブの父母会長に声をかけられた。学童保育に顔を出したとき、子どもたちが「一緒に遊ぼう」と手を引いてくれて遊んだことがきっかけで、決断した。

◆身内から「子どもが好きなら１回見に行けば」と言われて行ってみたのがきっかけ。

◆宿題をしたり、おやつを食べたり、遊んで保護者の帰りをまっている、保育園のようなところと紹介された。

◆高校の時の先生に「子どもが好き」ということを理由にすすめられた。

◆学生の時にアルバイトをしていた、１年間ほかの仕事についた後、次の就職先を探している時に、アルバイト時代を思い出し、行ってみたら常勤職員を募集していた。

◆アルバイトで働いた。そのまま指導員になった。

［結婚・出産で仕事を一度辞め、その後、資格を生かして再就職した（14件）］

◆大学卒業後、結婚して専業主婦になった。何か資格を生かす仕事がしたいと思い、自治体の広報を見て、臨時職員になる。

◆幼稚園、保育所に勤めた後、結婚退職。子どもが大きくなってから放課後児童クラブの募集に応募した。

◆公立幼稚園に就職して退職、子どもに関わるサークルを開いた後、保育園でパートとして勤務。

その後、学校を休みがちになった子どもと一緒にがんばろうと、自治体の指導員の採用試験を受けた。

◆以前は福祉施設に勤務。子どもが大きくなるまでは、パートとして別の職種で働く。子どもの進学を機に、子どもが世話になった学童保育に勤めた。

◆以前は児童養護施設で中学生・小学生を担当していた。自分の子どもが小学生になったので働くことにして、ハローワークで募集を見た。面接で保護者の気持ちに共感して働いてみようと思った。

◆子どもの中学入学を機に、自治体の非常勤指導員採用試験を受けた。

◆20 年近く主婦をしていたが、子育てに一息つけた時に行政広報で指導員募集を知り、応募した。

◆第一子が誕生した後、誘いを受けた。子どもを実家に預け、午後から指導員として働くことになった。

◆結婚後、新しい仕事を探していたとき、指導員の経験のあった親戚から進められた。

◆結婚前、児童養護施設に勤務していた。結婚後、小学校の補助員（２年）を経て、希望して学校敷地内の放課後児童クラブに勤めるようになった。

◆幼稚園教諭をしていたが結婚で退職した。子育てが一段落して保育園が放課後児童クラブを始めるので手伝ってほしいと誘われた。

◆末子が小学校入学時に、知人に学童保育の指導員にならないかと誘われた。

◆結婚を機に転居した先のハローワークの紹介で就職した。

◆結婚前は養護施設で働いていた、結婚後、友人から放課後児童クラブを「手伝ってほしい」と頼まれた。自分の子どもが３人になって、一時やめた。一時転居したが戻ってきて、また以前の同じ放課後児童クラブの指導員から誘われ、仕事を再開した。

［保育士・幼稚園教諭（非常勤）から転職（転勤）した（９件）］

◆当初はパート採用。前職を辞し、あらたに仕事を退職して仕事を探していたときに出会った。

◆保育士として保育園に働き始めた頃に保護者から誘いを受けた。

◆幼稚園に勤めていたところから引っ越して転職を考えていたら母に勧められた。

◆幼稚園の期限採用の雇用が終わるときに、次の就職先として紹介された。

◆保育園の保育士をしていた時に、当時指導員をしていた人に誘われた。
◆幼稚園・小学校の講師を経験したときに、学童保育の大切さを感じて転職した。
◆幼稚園・保育士として働いていたときに、小学校のＰＴＡ会長に「あらたに学童保育をつくるから指導員として手伝ってほしい」と声をかけられた。
◆幼稚園・保育園で働いていて、放課後児童クラブの保護者に誘われた。見学に行って、「小学生の子どもたちとのやりとり、おもしろいかも」と思って働く気になった。
◆大学卒業後、社会福祉法人の保育士をした。その後、同じ法人が運営する放課後児童クラブに転勤になった。

［学生の時から自ら希望して就職した（７件）］

◆学生のとき、「夏休みにボランティアさせてほしい」と電話した。１か月アルバイト。その経験から、「（正規職員で）働きたい」と申し出た。
◆教育実習で「幼児教育の現場でも小学校期を見通した保育の必要」を知ったときに、自分は小学校に上がってからの子どもと保護者の支えになる仕事をしよう、と思った。
◆大学卒業後、指導員の募集をしている学童保育を知って働いてみようと思った（子どもの頃、通っていた学童保育が自分にとってあたたかい場所だったことを思い出した）。
◆学生の時に参加していた子ども会での子どもとの出会い（子どもが自分との信頼関係を支えにして、一歩を踏み出せた経験）から、子どもの側にいて支えになれる仕事をしたいと思った。
◆学生ボランティア（小学校支援）で「もっと子どもたちの成長をみていたい」と思った。
◆社会福祉士の資格を生かした仕事をしようと在学中に社会福祉法人の募集を見て決めた。そこが放課後児童クラブを運営していた。
◆保育士養成専門学校在学時のボランティアで学童保育を知った。卒業時に、ボランティア先の園長から誘われた。
◆保育専門学校在学時にアルバイトを３年間した。卒業後、正規職員として就職した。

［自分の子どもを通わせた放課後児童クラブから誘われた（４件）］

◆長女が通った学童保育から、指導員がやめたので代わりにやってほしいと相談された（それまで保育所パートとして勤務していた）。
◆我が子を通わせていたクラブの指導員が定年退職した後に指導員になった。
◆子どもが通っていたクラブで、資格のいらない「補助員」の指導員募集を知った。
◆子どもが学童保育に通う保護者だった。人数が増えて分離する際に、指導員をしてほしいと言われた。

［アルバイトから常勤指導員になった（２件）］

◆自分が通っていた放課後児童クラブで以前からアルバイトをしていた。学校卒業後、１

年アルバイトとして働き、常勤指導員になった。

◆友人から誘われた。１年間はアルバイトかパートかわからない状態で働いた。その後、保護者に正規職員にと誘われた。

［放課後児童クラブのつくり運動をしていて、自分が指導員になった（２件）］

◆自分の子どもが保育園のとき、放課後児童クラブがなかったので、つくる運動をして、そこの指導員になった。

◆子どもの小学校入学を機に放課後児童クラブをつくる運動をし、当時、保育士をしていた自分が放課後児童指導員になった。

［定年後の再就職先（１件）］

◆定年まで保育士をした。その後、学童保育をつくる運動をしていた人たちに頼まれた。

２　就業当初の状況（66 件）（内容によって分類したので、件数は回答人数より多い。）

［アルバイトから常勤職員になったことに違いを感じた/常勤職員の責任の重さを感じた。（９件）］

◆当初は臨時職員のため、保育活動の制限があった。雇用の不安定さ、正規職員の異動などから一度、指導員を辞めた。その後、同じクラブにいたことのある指導員から誘いがあって公設民営のクラブの正規職員に復職した。想像していたよりも大変な仕事だと思った。

◆準補助指導員から正規指導員になった。保育計画をたて、他の指導員にも指示を出し、子どもとも保護者とも話しあう立場に変わって、大変な毎日だった。

◆アルバイトのときと異なって、保育の考え方、保護者との関係づくり、地域との連携などで壁にぶつかった。

◆専任になった時の責任の重さから、一度退職したが、再度誘われて仕事を続けた。

◆ボランティア時の「お姉さん」から「先生」に変わったことが、子どもも自分も慣れなかった。

◆パート指導員の時、家庭の事情で退所する子どもが見せた涙に、子どもにとって大切な場所だったと気づいて、働き続けることにした。どんどん子どもの数が増えて、一度も話すことができない子どももいるなど、子どもとの関係が薄くなってしまった。

◆正規職員に誘われたとき、子どもと遊んでいるだけの仕事と違うことは実感した。

◆アルバイト（共同学童保育）は６年生までだった。就職したところが３年生までの公立の学童保育でギャップを感じた。

◆子どもと遊んでいるだけだったアルバイトから正規職員になった初日に、子どもが学校

を出たのに帰ってこないということがあり、探しに行って連れてけるということがあった。その日、責任感の重さから思わず泣き出してしまった。

［仕事につく前に言われたこと、思っていたこと、実際の間にギャップがあった（７件）］

◆当初は「見守り」が仕事だと思っていたが、「子どもたちが安心してかえってきて、安全に楽しく過ごす場になるには、ただ見守っているだけでいいのか」と思うようになった。

◆「おやつをあげて子どもをみていればいい」という話だった。／いろいろアイディアを出すのが楽しくて（おやつの工夫、戸外活動など）、あまり深く考えずに、子どもたちと過ごしていた。

◆最初は、「子どもたちと一緒に遊べる」と思った。相談に来る保護者や、つらそうな顔をして学童保育に通ってくる子どもがいるのをみて、自分につとまる仕事かどうか迷った。

◆「保育士の経験が生かせれば」と思って引き受けたが、自分の経験してきたこととは異なることが多く、悩んだ。／指導員同士の研修会、交流会に出て、先輩指導員に教えてもらうなどして仕事を続けた。

◆自分の子どもの頃は指導員のことを「遊んでくれるお兄さん、お姉さん」と思っていたが、実際に働いてみると、ただ遊んでいるだけではダメで、「周りの子どもの様子や子ども同士の関係などにも目を配ること」などむずかしいことが多く、四苦八苦した。

◆保育園の子ども以上に迫力のある動き、学童期の子どもの持つ力に驚いた。子どもと真剣にかかわりあうなかで、学童保育という場が楽しくなっていった。

◆はじめは先輩指導員に「しっかり子どもと遊んであげてね」と言われた。子ども同士のトラブルに適切に対応できず保護者にもきちんと説明できずに悔しい思いをした。

［開設したばかりの時に常勤職員になった（５件）］

◆雇用されて即、「施設長」となった（正規職員が一人のため）。／はじめは「子どもと楽しく遊べればそれでよい」「小学生だからなんでもできるだろう」「注意や指示は、いえば聞いてくれる」と思っていた。実際はすべて違った。

◆一週間、他のクラブで研修の後、４月１日より、一人体制での指導員になった。当初、保護者の協力があり、途中から二人体制。

◆保護者会運営で開設したばかりの学童保育だった。保護者と相談しながら手探りで保育内容を考えた。

◆（開設したばかりなので）職員全員が手探り状態からはじめた。保護者に心配かけまいと、良いことだけを伝えていたら、そのことだけでは信頼関係がつくれないことに気づいた。

◆自分の子どもも同じ学童保育に通っていた。職員の方と、開設したときに指導員になっ

たので、一緒に手探りの毎日だった。

［子どもとのかかわりで新たに気づいたり悩んだりすることがあった（25件）］

◆自分が職場で不安と緊張のなかにいるとき、１年生の女の子が「一緒に校庭で遊ぼう」と手を握ってくれた。このとき、「ここで働いていきたい」と思った。／体当たりで子どもと接することで、子どもの気持ちに近づけることがうれしかった。

◆宿題、おやつ、後片付けを終えて、近くの公園に行って遊ぶ。このときの子どもたちの解放感からわきでる自然な姿に、「子どもの世界」そのものを感じた。

◆子どもの「ただいま～」に「おかえり」とこたえることが気恥ずかしかった。最初から子どもたちと一緒に宿題（の手伝い）をし、一緒に遊ぶことができた。

◆１年生から６年生までが毎日一緒にいるなかで、高学年が低学年にやさしく接することが身についていることに感動した。子どもと同じ気持ちになって一緒に過ごすようにした。子どもたちと「きょうだい」のような接し方をすることが、自分にあっていると思った。

◆自分自身は子どもの頃から外遊びは苦手で、子どもに誘われることも自分には無理なことが多いように思えて、子どもとのトラブルがあったのを契機にやめようかなとも思った。翌日、トラブルになったその子どもから「○○へ。○○はよくあそんでくれるでしょう」と書いた「賞状」をもらって、戸惑いと共に「なんか……がんばってみようかな」という気になった。

◆子どもたちが私を家族のように思ってくれて、信頼してくれているんだなと肌で感じた。

◆ケンカやトラブル、無断でクラブを抜ける子どもが続いて、疲れ、「もうやめたい」と思ったとき、子どもに「なんで昨日は休んだ？」「絆創膏貼ってやろうか」などの何気ない言葉に元気をもらって続けられた。

◆１年生から６年生までの年齢差のある子どもへ対応できるか不安だった。

◆「子どもたちを『おかえり』とむかえること」「子どもに『先生いつ辞めるの』と言われたこと」が驚きだった。

◆当初は子どもたちの方が“先輩”で、子どもから“後輩”扱いされる日々だった。経験もないなかでのとまどいを、指導員研修で話した時に先輩のアドバイスをもらった。背伸びせず、ありのままでまっすぐ接していこうと思えるようになった。

◆はりきって子どもたちと接していたが、大勢の子どもたち一人ひとりとていねいに向きあうことがむずかしかった。

◆他の自治体で、１年間、アルバイト指導員として働いた後、正規指導員になった。子ども同士のトラブルに出会うと、あせって落ち込むことが多かった。

◆自分を「オレより後から入ってきた」という子どもへの対応にとまどった。／先輩指導員のアドバイスで少しずつ慣れることができた。

◆「いつまでいるの？」と子どもに試された。子どもと遊び、ぶつかりながら子どもの信

頼を得る努力をした。そのなかで、「もっと学習しなければ」と思った。

◆あまり予備知識のないまま働きはじめた。子どもとのかかわりがこれほどむずかしいものだとは想像していなかった。最初は何度もやめたいと思った。

◆最初、子ども（男の子）たちから「いつやめるん？」「(指導員として）みとめてないからな」と言われた（そのクラブの指導員が定着していなかった)。子どもの気持ちに気づかず、子どもの心を傷つけてしまうこともあって、自信をなくしていった。

◆当初は、自分自身の気持ちを子どもに言葉で伝えられないことがあった。

◆最初は、子どもたちを遠目から見ている感じだった。

◆子どもに毎日のように振り回されたり、問題が次から次へと降りかかったりした。

◆勤めはじめてすぐに、自分（指導員）からは理解できない行動をする子どもがめについて、わからないながらも真正面からぶつかって、あきらめないでかかわった経験がある。未熟だったけどよかった経験だった。

◆子どもから「前はそういうやり方じゃなかった」と言われ、子どもの不安に気づいた。子どもに聞きながら仕事をして、高学年の女子とも信頼関係がつくれるようになれた。

◆子どもが児童クラブに通ってきている間になんらかの成果をみたいとあせった。

◆（転職前まで)「子どもはどうしてわがままで、すぐけんかをはじめ、言うことを聞いてくれないのか」と悩んできた。学童保育に来てしばらくもそうだった。

◆指導員として何をしたらいいのか、わからなくて不安だった。とにかく、「ただいま」と帰ってきた子どもたちがホッとできる場にしようと思った。

（自分の子どもとの関係）

◆自分の子どもも同じ学童保育に入っていたので、「保育士が（職場で）自分の子どもをみてはいけない」という原則に反して、どうやって公平な保育をするか、親子共々苦労した。

[保護者との関係で気づいたり悩んだりすることがあった（6件)]

◆子どものケンカ、ケガへの対応、保護者への対応等から、この仕事の難しさを感じた（最初の頃は子どもや保護者にどのように対応するか悩んでいた)。

◆新米指導員の自分を子どもや保護者がどう見ているかが気になり、子どもにも遠慮するようになってしまった。先輩指導員が「無理しないで」と声をかけてくれ、私の子育てにも気配りしてくれて肩の力が抜け、元気になった。

◆当初は気負いすぎて、子どもに「できたか、できなかったか」を問うたり、管理的になったりした。保護者にも、事実だけを伝えて不快にさせることもあった。

◆人と話すことが苦手だったが、保護者に話さなければならない機会が増えた（乗り越えるため研修等にもできるだけ多く参加した)。

◆保護者に何を話せばいいのか悩んだ。先輩指導員のアドバイスで少しずつ慣れることができた。

◆保護者（父母会）のエネルギーに驚くと同時にはげまされている。保護者の迎えの時の声かけ、会話を大切にしている。

［放課後児童指導員の入れ替わりが激しかった。（４件）］

◆勤め始めたころ、指導員が次々とかわって、職員体制も整わず、辞めていくこともがたくさんいた。当初は、父母会運営と言うこと自体を理解するのが難しかった。

◆公立から民営（指定管理）に移って、子どもたちを引き継いだ。子どもたちが指導員全員が入れ替わったことに反発することもあって、子どもとの信頼関係を築くのに２年程かかった。

◆自分が入る１年前に、指導員の総入れ替えがあって、みんな新しかった。隣のクラブのベテラン指導員からアドバイスをもらって運営した。

◆３月から仕事に入った途端、それまでいた指導員が全員やめることがわかった。覚悟を決めて、４月に臨んだ。

［放課後児童指導員間のことで悩んだり救われたりすることがあった（４件）］

◆当初は大規模な学童クラブの加配職員。建物の貧しさに驚いた。先輩指導員の「子どもを引きつける技能や子どもとの遊び方」「保護者との会話力」に感銘を受けると同時に、自分も同じようにできるだろうか……と不安も感じた。

◆新人の時、大ベテランの指導員がしていたことを同じようにやろうと思って精神的に追い込まれた。相方指導員の「私たちのできることをしていきましょう」の一言に救われ、それから少しずつ周りを見られるようになった。

◆長い歴史のある学童保育だったので、最初はその施設・設備環境の歴史に圧倒された。そこでの生活ルールを知り、確かめることに時間がかかった。

◆一年目は２つのクラブをかけもち。あわせて週４日の勤務。先輩指導員が指導員同士の連絡帳をつくってくれて、コミュニケーションがはかれ、信頼関係をつくれた。

［その他（６件）］

◆一時期、ケガをして休職したが、復職できて、指導員になることができた。

◆学童保育の主役は子どもであること、子どもと保護者には公平で公正な態度で接しようと思って仕事を始めた。仕事に慣れてきて、子どもたちに厳しく接することが多くなってしまった。

◆少人数（24 人）の学童保育で、子どものほうから声をかけてくれた。最初から子どもたちと楽しく過ごせた。経営が厳しい（子どもの人数で指導員の雇用が決まる）、施設の立ち退き問題があるなどのことが後からわかった。

◆最初のクラブは施設環境が劣悪で、子どもも少なく、運営も大変だったが、保護者と指導員はとてもよく協力していた。／復帰してからは以前に比べて「落ち着けない子、

周りの子との関係がうまくできない子」が多く、自分にも余裕がなかった。ベテラン指導員の子どもを認め、おおらかな心で包みこむ姿から学んだ。

◆スタート時から学校（校長先生）の支えがあった。

◆おやつが思ったより手のこんだものだった。

③　放課後児童指導員の仕事を通じて学んだこと、必要と思う資質・技能など（75件）（内容によって分類したので、件数は回答人数より多い。）

［主に子どもとのかかわりの中で、子どもに気づかされた。（29件）］

◆保育中の子どものケガがきっかけで、「安全」に気がとられ、子どもをしばりつけてしまったことの反省から、一人ひとりの声に耳をかたむけて、子どもと一緒に考えていくことを大切にするようになった。

◆毎日少しずつ成長を見せてくれる子どもたちに支えられている。

◆「遊んだとき、勝ち負けにこだわりすぎる、後片付けや物への取り扱いが雑」など、気づいたことを指導員間で話しあい、子どもと一緒に改善してきた。

◆同じ子ども集団に同じ指導員がじっくり関わることの大切さ。

◆大規模クラブから、20名以下のクラブに異動した。当初は子どもたちがあまりに見えすぎて細かいことばかり注意していた。子どもたちを受けとめる前に型にはめようとしていることに気づいてから、自分を変えていくことができた。子どもたちがのびのび過ごせていること、子どもが自分を親と同じくらい信頼してくれているのを知ったときがうれしかった。

◆ＯＢに再会した時、なつかしがってくれた。児童クラブの生活が思い出に残っていることを知って、（成果をあせらずに）子どもとともに生活をつくることの大切に気づかされた。子どもに対して公平で公正であること。（指導員も含めて）自分もみんなも楽しく過ごせるようにする。

そのために、一緒にルールを守る。「子どもを好き」であること。自分の子どもが自分の進路について、「保育士になろうかなと」言ってくれたとき、うれしい気持ちになった。

◆転居後、再び指導員の仕事についた。そこで子どもの感動したり、喜んだりする姿、さりげないやさしさにふれて、自分もそのなかに一緒にいられる大人でありたいと思った。

◆子どもから見て、わかりやすい（自分の行為を子どもに説明できる）指導員になることを先輩指導員に教えてもらった。

◆子ども同士の言動から学ぶ（気づく）気持ちになれて、子どもとの関係が深まった。子どもとも保護者とも、信頼関係は毎日の積み重ねのなかで築いていくものであると思っている。

◆「すぐに評価の目でみる、発達課題を追いかける」などの、教師、保育士としての自分

の経験が、子どもとありのまま、居心地のよい学童保育をつくることの邪魔になった面もあった。

◆大人数の異年齢の子どもを一緒にみる仕事は、思ったよりむずかしく、あらたな専門性と指導員のチームワークが必要だった。

◆子どもたちに接する仕事をして、自分の子育てが諭されたような気持ちになった。自分の子育てでできなかった「子どもの心に寄り添うこと」の意味を仕事のなかでやり直している思いがする。子どもの「先回り」をしないで、おおらかに支え、子育てを楽しむ気持ちをもっていこうと考えられるようになった。

◆新年度、上級生たちの１年生への「おーいしっかりしろよ」「まだ無理だよ」などの言葉に、その子自身がここで育って下級生の育ちを見つめていることを感じた。

◆指導員は、子どもと長い時間を一緒に過ごすので、「公平でしかも個別的な支援」を子どもたちに受けとめてもらえるようになることが必要だと思う。

◆手探りだったが、子どもたちと笑って（時には泣いて）毎日の子どもたちとの生活が楽しかった。保護者が力をあわせて、施設も運営も子どものことも支えてくれた。中学生になっても学童保育に顔を出して、手伝いもしてくれる（ちょっと困ったことがあったり、家のカギを忘れたり、さみしくなったりする時が多い）。そういう子どもたちが顔を出せる場でありつづけたい。

◆すべての子どもと「一言会話（一人ひとりと向きあう時間を必ずつくる）」を心がけている。６年生の子どもが、「俺たちに言ったことは、自分もちゃんとやるんだな」とつぶやいた声に、みているんだなと感じた。

◆夏休みに男の子に虫探しに誘われたときの会話から、「子どもにもっと教えてもらおう。子どもと一緒にものごとを感じてみよう」と思っていた。しかし学童保育には、子どもと楽しいという気持ちを共感することで、お互いに向き合える環境があることを知った。

◆子ども同士で楽しめる場になるよう、支援すること。そのなかで安全に過ごせるように、子どもたちを見守ることが大切な役目だと思う。

◆学童保育では元気な子が学校を休みがちに。その子との３年間の関わりが私を成長させてくれた。第二子～第四子が生まれても、産休育休をとって働けるように保護者と同僚が支えてくれた。

高校生になった子どもが顔を出してくれることがうれしい。

◆子どもの「帰宅・手の消毒・手洗いうがい、物の片付け、おやつ、宿題、遊び（戸外・室内）」という過ごし方が子どもの中に定着している。子どもと一緒に行動しながら、子どもの気持ち

に気づいて子どもがよかったと思える学童保育生活にしていきたい。

◆子どもの姿から学び、発見することがある。そのことを保護者と共有できるように伝えることを大切にしていきたい。

◆仕事に慣れて来た時に、行き違いから子どもに反発されたことがあって、それまで自分がどんな思いで子どもと向きあってきたか反省させられた。
◆同僚も次々にやめることが続いたとき、子どもたちの不安そうな目を見て、「この子たちのそばに居続けることが必要なのではないか」と思った。保護者からも「三年間お世話になって、学童保育は遊びを通して子どもの心を成長させてくれるとても貴重な場所だとわかった」と言われたことが大きな励みになった。
◆子どもの得手不得手や作業がゆっくりな子、速い子などの違いを知って、それぞれの気持ちや特徴を生かせるかかわりができたときは、自分もうれしい気持ちになれる。
◆１番に心がけたのは、「子どもと全力で遊ぶ（真剣に付きあう）こと」
◆子どもは自分（放課後児童指導員）の接し方次第で素直になったり、反発したりと変わることに気づいた。今は、子どもたちが自分を育ててくれたと思っている。
◆自分には苦手なことがあるが、それは子どもたちも同じで、それを認めあえたら前向きな気持ちになれることに気づいた。毎日がおどろきと発見の連続で、大変なこともあるが、子どもと向きあえる時間が多いことが自分にとって最大の力だと思っている。
◆子どもたちの笑顔が「またがんばろう」という気持ちにさせてくれる。
◆ＯＢ・ＯＧになった子どもたちが学童保育に顔を出してくれることが指導員をしてきてよかったと実感する。

［主に保護者とのかかわりの中で学んだ（10件）］
◆保護者と子どものことを伝えあい、信頼してもらえるようになる／子どもの気持ち、話を聞き、耳をかたむける。気になることがあれば、指導員同士で打ち合わせを行う（見通しをつくれる力が必要だと思う）。
◆指導員を人間的にも職業としても育ててくれる子どもと保護者の存在を知って、その人たちの気持ちに応えたいという思いで働いている。
◆必要と思う資質は、「保護者の理解と協力が得られるようになること」「子どもと一緒に楽しく遊べること」「子どもたちが大きくなったときによいところだったと思ってもらえるようになる
こと」。
◆保護者（集団）が支えてくれた。子どもと一緒に遊ぶこと自体が大好きなことが、仕事を続けられた理由だと思う。
◆保護者が、自分が子どもと信頼関係をつくれるようになるまで自分の未熟さを見守り支えてくれたこと。
◆保護者の理解があって、勤務条件やクラブの環境の改善に一緒に取り組むことができた。新しい一年生と保護者を迎えるたびに、新たな気持ちでスタートすることにしている。
◆保護者の迎え（お迎えが原則）の時に伝えあうこと、下校時の子どもの表情から子どもの様子をくみ取ることを大切にしている。保護者と先輩指導員に支えられてきたと思

う。

◆保護者が「学童保育での自分の子どもの様子、周りの子どもの様子を親として知ろう「休みのときに保育参加をしよう」と働きかけてくれた。

◆（３年経った時に）保護者から「指導員の仕事、絶対続けてください」と励まされた。

◆連絡帳の往復や保護者との話ができていると、子どもへの声かけやかかわり方を工夫することができ、トラブルを未然に防いだり、本人や周りを安心させることができるようになる。

［主に指導員間のかかわりの中で学んだ。（４件）］

◆教えてくれる先輩がおらず、学生時代に学んだことを思い出しながら手探りで工夫してきた。

月１回の他のクラブとの合同の事例検討会、施設長会議がとても役立った。

◆同僚の指導員が若い自分の提案を受け入れて保育に取り入れてくれていたこと。

◆先輩指導員のアドバイス、さまざまな研修から、「子どもの言動の背景に気づくこと」「子どものせいにしたり、決めつけたりしないこと」の大切さを学んだ。

◆先輩指導員たちは、自分の相談にたっぷり付きあってくれ、実践にすぐ生かせるアドバイスをくれた。自分自身が遊びの楽しさを知って、子どもと一緒に遊べるようになること。遊びを通して信頼関係を築き、世界を広げることができる。遊びのなかでいろいろな力をつけていってほしい。保護者から「（自分が）元気になる言葉」をかけてもらえたことも支えになっている。

［学んだこと全般にわたるもの（15件）］

◆子どもに元気をもらい、保護者と周囲の人から学ぶこと。保護者がいつも気にかけてくれた。

◆子どもたちとたくさん遊ぼうと思っていた。トラブルがあったら、指導員同士で考え、子どもたちの言葉を聞いた。子どもたちといっぱい遊ぶこと。保護者と子どもたちのことを伝えあう大切さ、信頼関係を築くこと。

◆迎えにきた保護者を「おかえりなさい」と気持ちよく迎えること。迎えを待つ子どもにさみしい思いをさせないこと。

◆「親が子どもを思う気持ちと、保育の目線で子どもを見ている指導員と子ども自身の気持ちがそれぞれ違うのが当然で、指導員も子どもの気持ちをすべて理解できているわけではない」と教えられた。

◆子どもの力に気づくこと、地域と学校の理解を得ることの大切さ、保護者の協力。施設の老朽化のため引っ越しに取り組んだ。大人に混じって、子どもが自分たちの考えをもって子どもなりの立場で話し合いに関わってくれた。

◆「もう○年生だから」「母親だから」ではなく「その子」「その人」の考えに耳をかたむ

けることの大切さ。

◆保護者から、子どもへの対応が厳しすぎると苦情が。上司に、「苦情の声は宝だよ」と言われ、同僚や先輩が私の話を夜遅くまで聞いてくれ、「やめたい」という気持ちを克服できた。その子どもたちと自分を「おかあさん……あ」と言い間違えるほどの関係がつくれたことがとてもうれしかった。子どもへの個別の支援の必要性と集団生活とのかかわりを指導員の共通認識にすることが今後の課題。

◆常勤指導員一人体制に異動した時、保育の中身をどう考え、実践していくのか悩んだ。「3年生は（1、2年生を）引っ張っていく立場」と思い込んで子どもとかかわって、「子どもがやめたがっている」ことを知らされ、ショックを受けたことがある。そのことから「子どもたちにとって行かされる場所でなく、楽しく安心できる場にしていこう」と思った。子どもの様子だけでなく、指導員のかかわりの内容、思いも伝えて、保護者の気持ちを聞くことで「(指導員が) いるから安心」と言ってもらえる関係になれた。

◆日々の仕事で忙しい保護者が、安心して子どもを託せるようにすることが指導員の勤めだと思って働いている。

◆子どもの人数が 50 人くらいに落ち着いて、心に余裕ができた。はじめのうち、「子どものため」と思って、子どもをコントロールしようとしていた自分に気づいて、子どもと一緒に考えたり、子どもと同じ目線でかかわるようにすることができるようになった。そのとき保護者が、指導員が子どもとどのように接しているのか細かいところまで見てくれていることを知って、うれしく思った。

◆保護者とは日常の会話を大事にしている。子どもとは、子どもから相談される関係をつくる（子どもが自分たちで解決しようとする力を信じて待つ努力をする）ことを心がけている。

◆自分（本人）を認めてくれる先輩指導員がいることが、自分の支えになってきた。保護者には、「くわしく、それでもわかりやすいように」伝える努力をしている。子どもの成長を感じられる場面に出会えたら、それを保護者に伝えることが大切だと思う。毎日同じ時間、同じ生活をみんなで過ごすが、その時その時で、子どもたちの様子や態度は違う。その様子・変化に気づけて、子どもから「この人なら、どんな自分でも受け入れてくれる」と思ってもらえる指導員になりたい。

◆子どもたちが大人との信頼関係をもとに、さまざまなことに意欲や好奇心を持って過ごせるように心配りすること。子どもが苦しいとき、こまったときに、受け止めてあげられる人になること。保護者に子どもの日々の生活の様子を伝え、家庭と学童保育の子どもの姿を共有すること。子どもが大きくなったとき、何かつまずくことがあったときに、「学童保育に行きたい、話を聞いてもらいたい」と思ってもらえるようにと考えて保育をしている。

◆自分に子育ての経験がなく不安になることもあるが、同僚・先輩指導員と話しあうなかで、指導員の仕事を続けられると思えるようになる。子どもたちに人として生きてい